

動詞由来複合語の語構成から覗く日本の食卓文化

—「茶碗蒸し」か「土瓶蒸し」か—

吉田 妙子

1. はじめに

文化研究の領域は幅広く、対象によってその方法も歴史学、心理学¹、哲学²、社会学、文学、などさまざまな領域から取って来ることができる。筆者の専攻は言語学であって現在は思想・文化の専門ではないが、言語は文化と同様、構造体である。文化が言語によって伝達され、文化の中で言語も作られる以上、言語の中にも文化は必ず組み込まれているはずであろう。

本稿では、一見文化研究と無関係に見える言語学の方法を用いて動詞由来複合語の語構成を考察することにより、日本文化の一端を垣間見ることが試みるものである³。

2. NV型の動詞由来複合語の問題点

複合語とは、二つ以上の語が組み合わさってできた語であり（「販売」＋「ルート」→「販売ルート」等）、「動詞由来複合語」とは複合語の一部に動詞連用形⁴を含むといった語構成を持つものである。その種類は、以下ようになる。

(1) VN型：「飲む」＋「水」→「飲み水」等

NV型：①前項名詞が後項動詞の目的語成分：「水を飲む」→「水飲み」等

②前項名詞が後項動詞の修飾成分：「塩で焼く」→「塩焼き」等

AV型：「早く飲む」→「早飲み」、「一気に飲む」→「一気飲み」、「丸ごと飲む」→「丸飲み」、「吸って飲む」→「吸い飲み」等

この区別は、音韻構造、語構成、統語構造などの面で、実に截然と領域を分かち合っているのである。

2. 1. 動詞由来複合語のNV型とAV型の音韻構造の相違

動詞由来複合語のNV型とAV型において起こる音韻上の特徴は、連濁とアクセントの規則性である。

2. 1. 1. 連濁規則

このNV型動詞由来複合語は、音声上でもさまざまな規則性が見られる。その一つは、NとVが連続した場合の連濁規則である。連濁とは、2つの語が合成し

て一語になる場合、後接語頭の無声子音が有声化する現象である⁵。（但し、後接語の第2音がすでに濁音の場合は、頭子音は連濁しない。「した（舌）＋つづみ（鼓）」→「したつづみ（舌鼓）」など。）

前項名詞が後項動詞の目的語成分となる動詞由来複合語のNV型①では、多くの場合、連濁は起こらない。しかし、前項名詞が後項動詞の目的語成分ではないNV型②とAV型の場合はほとんどが連濁するのである⁶。

(2) NV型①	NV型②	AV型 ⁷
絵描き（えかき）	手書き（てがき）	走り書き（はしりがき）
缶切り（かんきり）	短冊切り（たんざくざり）	微塵切り（みじんざり）
蟻食い（ありくい）	犬食い（いぬくい）	只食い（ただくい）
石蹴り（いしけり）	足蹴（あしげ）	回し蹴り（まわしげり）
茶漉し（ちゃこし）	絹漉し（きぬこし）	裏漉し（うらこし）
状差し（じょうさし）	脇差し（わきざし）	二本差し（にほんざし）
手摺り（てずり）	色摺り（いろずり）	一枚摺り（いちまいずり）
風呂炊き（ふろたき）	関東焼き（かんとうだき）	空焼き（からだき）
魚釣り（さかなづり）	沖釣り（おきづり）	一本釣り（いっぽんづり）
陣取り（じんとり）	いとこ取り（いとこどり） ⁸	横取り（よこどり）
襖張り（ふすまはり）	鶯張り（うぐいすばり）	切り張り（きりばり）
麦踏み（むぎふみ）	足踏み（あしふみ）	揃い踏み（そろいふみ）

これにより、NV型①、つまり目的語と動詞連用形で構成される複合語は一語化しにくいと考えられる。生成文法では目的語は動詞の内項とされ、結束性の強いペアと捉えられているのに、日本語ではくっつきにくいペアになっているのはおもしろい現象といえよう。

2. 1. 2. アクセント規則

動詞由来複合語が引き起こす音声上の規則のもう一つは、アクセントである。

2. 1. 2. 1. 動詞部分が3モーラの動詞由来複合語のアクセント規則

まず、動詞連用形が3モーラの場合は、動詞部分の1モーラ目にアクセント核が来る。つまり、アクセント記号は[-3]になる。これは、NV①、NV②、AV、いずれも同じである。また、前項のA、Nが何モーラの場合でも同じである。

(3) Nが1モーラ：根回し（ねまわし） 木流し（きながし）

Nが2モーラ：猿回し (さるまわし) 鳥流し (しまながし)
 Nが3モーラ：盃回し (たらいまわし) 筏流し (いかだながし)
 Nが4モーラ：狂言回し (きょうげんまわし) 精霊流し (しょうりょうながし)

このことから、「後項の動詞連用形が3モーラの動詞由来複合語は、動詞部分の1モーラ目にアクセント核が来る」という一般化ができる。

2. 1. 2. 2. 動詞部分が2モーラの動詞由来複合語のアクセント規則

動詞連用形部分が2モーラの場合は、NV①とNV②でアクセント核が違う。

(ア) 動詞部分が2モーラ語のNV②とAV

まず、動詞部分が2モーラのNV②とAVは、(2)のNV型②とAV型の語を音読してみればわかるように、NとAがそれぞれ何モーラであろうと、平板型になる。つまり、アクセント記号は[0]になる⁹。

(4) NV型②	AV型
手書き (てがき)	走り書き (はしりがき)
短冊切り (たんざくぎり)	微塵切り (みじんぎり)
犬食い (いぬぐい)	大食い (おおぐい)
足蹴 (あしげ ¹)	回し蹴り (まわしげり)
絹漉し (きぬごし)	裏漉し (うらごし)
脇差し (わきざし)	二本差し (にほんざし)
色摺り (いろずり)	一枚摺り (いちまいずり)
関東焼き (かんとうだき)	空焼き (からだき)
沖釣り (おきづり)	一本釣り (いっぽんづり)
いいとこ取り (いいとこどり)	横取り (よこどり)
鶯張り (うぐいすばり)	切り張り (きりばり)
足踏み (あしぶみ)	揃い踏み (そろいぶみ)

ここから、「後項に2モーラの動詞連用形が来る動詞由来複合語で連濁するものは、アクセントは平板型になる」という一般化が可能になるであろう¹⁰。

(イ) 動詞部分が2拍語のNV①

動詞部分が2モーラのNV①は、最も複雑である。

a. まず、動詞部分Vの原形が頭高型で、名詞部分Nが2モーラの場合は、動詞部分Vの冒頭にアクセント核が来る。つまり、アクセント記号は[-2]である。しかし、名詞部分Nが3モーラ以上になると、アクセント核が一つ前にずれて[-3]になる。次の例を見られたい。

(5) 切る	(きる)	差す	(さす)
缶切り	(かんなぎり ¹¹)	状差し	(じょうさし)
硝子切り	(がらすきり)	醤油差し	(しょうゆさし)
巾着切り	(きんちゃくきり)	刺捕差し	(さいとりさし)

b. しかし、aの条件で、本来のアクセントの位置の音が長音か撥音である場合は、アクセント核はさらに

一つ前にずれる¹²。

(5) 書く	(かく)	取る	(とる)
物書き	(ものかき)	塵取り	(ちりとり)
宛名書き	(あてなかき)	鼠取り	(ねずみとり)
絵本書き	(えほんかき)	機嫌取り	(きげんとり)
看板書き	(かんばんかき)	月給取り	(げつきとり)

c. しかし、bの条件を満たす例は、すべて連用形Vの頭子音が無声子音であることに気づく。「出す」「投げる」「脱ぐ」「練る」「飲む」「読む」など、動詞原形のアクセントが[-2]で、連用形Vの頭子音が有声音の場合は、名詞部分Nのモーラ数に拘わらず、すべて平板型になる。

(5) 原形	Nが2モーラ	Nが3モーラ以上
出す (だす)	艶出し (つやだし)	頭出し (あたまだし)
投げる (なげる)	槍投げ (やりなげ)	砲丸投げ (ほうがんなげ)
縫う (ぬう)	物縫い (ものぬい)	衣裳縫い (いしょうぬい)
脱ぐ (ぬぐ)	靴脱ぎ (くつぬぎ)	草鞋脱ぎ (わらじぬぎ)
練る (ねる)	葛練り (くずねり)	膏薬練り (こうやくねり)
飲む (のむ)	酒飲み (さけのみ)	コーヒー飲み (コーヒーのみ)
読む (よむ)	本読み (ほんよみ)	論語読み (ろんごよみ)

なぜ、こうなるのであろうか。今一度、(4)のアクセント規則を眺めて見られたい。その規則は、「後項に2モーラの動詞連用形が来る動詞由来複合語で連濁するものは、アクセントは平板型になる」というものであった。連濁は連続する二語の一語化を目指すものであったし、平板型は最も単調で安定している。後項Vの頭子音が無声子音であれば平板化して安定させ、それから連濁して一語化を図る。しかし、後項Vの頭子音が有声音であれば連濁する必要はない。つまり、有声同化を起こす必要がない。有声音を頭子音に持つ動詞由来複合語は、名詞化しやすいのである。

ここから、「後項の連用形Vが、原形のアクセントが[-2]で、有声音で始まる動詞である場合は、複合語はすべて平板型になる」という一般化ができる。

d. 動詞Vの原形が2モーラの平板型か、または3モーラ以上である場合、名詞部分Nが2モーラの場合は、アクセントは平板になる。つまり、アクセント記号は[0]である。しかし、名詞部分Nが3モーラ以上になると、アクセント核は動詞部分の前に来る。つまり、アクセントの型は[-3]になる。

(5) 原形	Nが2モーラ	Nが3モーラ以上
貸す (かす)	金貸し (かねかし)	高利貸し (こうりかし)
消す (けす)	艶消し (つやけし)	インク消し (インクけし)
釣る・吊る (つる)	首吊り (くびつり)	魚釣り (さかなつり)
塗る (ぬる)	壁塗り (かべぬり)	ペンキ塗 (ペンキぬり)

張る・貼る (はる) 弓張り (ゆみはり) ラベル張り (ラベルはり)
 割る (わる) 股割り (またわり) 西瓜割り (すいかわり)
 付ける (つける) 味付け (あじつけ) ボタン付け (ボタンつけ)¹³
 掛ける (かける) 餡かけ (あんかけ) 衣文掛け (えもんかけ)
 曲げる (まげる) 臍曲げ (へそまげ) スプーン曲げ (スプーンまげ)

名詞部分Nが2モーラの場合に語全体が平板型になるのは、動詞原形のアクセントの痕跡を残しているからではないだろうか。前項名詞Nが短ければ短いほど、後項動詞Vのもともとのアクセントの影響が強くなる。後項動詞Nのもともとのアクセントの影響を逃れるのは、前項名詞Nが3モーラ以上になって初めて可能になるようである¹⁴。

e. 動詞Vの連用形が2モーラで、その末尾音節が母音の場合、Nのモーラ数に拘わらず、複合語のアクセントはすべて平板型になる。つまり、語末で連続する2つの母音は違った高さにならないようになっているのである¹⁵。

(5 ^m)	原形	Nが2モーラ	Nが3モーラ以上
	追う—おい	鳥追い (とりおい)	
	変える—かえ	席替え (せきがえ)	衣変え (ころもがえ)
	買う—かい	人買い (ひとかい)	先物買い (さきものがい)
	食う—くい	人食い (ひとくい)	下手物食い (げてものがい)
	吸う—すい	肝吸い (きもすい)	
	添える—そえ	肌添え (はだそえ)	温野菜添え (おんやさいぞえ)
	縫う—ぬい	物縫い (ものぬい)	衣裳縫い (いしょうぬい)
	結う—ゆい	髪結び (かみゆい)	

2.1.2.3. まとめ

以上のことをまとめると、以下の表のようになる。

(6) 動詞由来複合語のアクセント

囲み文字はアクセント核

Vのモーラ	Vの頭子音	動詞原形のアクセント	1N 1A	2N 2A	3N以上 3A以上
3V	/	/	N \overline{V} VV A \overline{V} VV [-3]	NN \overline{V} VV AA \overline{V} VV [-3]	NNN \overline{V} VV AAA \overline{V} VV [-3]
			2V	無声	\overline{V} V 頭高 [-2] NVV ¹⁶ AVV
有声	VV, VVV 平板 [0]	NNVV 平板 [0]			
無声	V \overline{V} V 中高 [-2]				
有声	\overline{V} V, V \overline{V} V 頭高、中高 [-2]			…NNNVV …AAAVV 平板 [0]	
V末尾が母音	/				

以上、動詞由来複合語のアクセント規則は、次のように一般化できる。

- i. 後項の動詞連用形が3モーラの場合、いかなる語でも [-3] になる。
- ii. 後項の動詞連用形が2モーラの場合で、動詞部分の頭子音が無声子音で、前項名詞が2モーラの場合 [-2] になる。
- iii. 後項の動詞連用形が2モーラの場合で、動詞部分の頭子音が無声子音の場合と、動詞部分の頭子音が有声子音で原形が平板型の場合で、前項語が3モーラの場合は [-3] になる。
- iv. その他の場合は、すべて [0] になる。

2.1.3. 動詞由来複合語の種類がアクセントと連濁に与える影響

アクセント規則には、必ず例外 (と見えるもの) が存在する。

例外1. (5)の規則の例として「ちりとり」「かんきり」(いずれも [-2]) があるが、「国盗り (くにとり)」「足切り (あしきり)」は、いずれも [0] になる。また、(5')の規則の例として「宛名書き」([-3]) があるが、これは [0] のアクセントもあるのではないか。また、「安物買い (やすものかい)」は「やすものがい」という読み方もあるのではないか。

解釈:「国盗り (くにとり)」「足切り (あしきり)」はいずれも文字通りの即物的動作ではなく、比喩的動作によって表されたコト名詞である。これに対して、「ちりとり」「かんきり」は具体的なモノ名詞である。また、「宛名書き」が [0] になるのは「あてながき」と連濁して読む場合である。「あてなかき」[-3] は具体的な動きを表す動作名詞かヒト名詞であるが、「あてながき」[0] は、「宛名の書かれ方」などを表す、コト名詞である。また、「安物買い」の読み方は「やすものかい」も「やすものがい」もあるが、「やすものかい」と読む場合のアクセントは [-3] の中高型でヒト名詞か動作名詞、「やすものがい」と連濁して読む場合のアクセントは [0] の平板型でコト名詞のみである。

例外2. (5^m)の規則の例として「またわり」「えもんかけ」「ボタンつけ」があるが、「薪割り (まきわり)」は [-2] である。また、「襷掛け (たすきがけ)」「ランク付け (ランクづけ)」は [0] である。

解釈:「またわり」も「まきわり」も動作名詞であるが、「またわり」は比喩的動作を表す動作名詞で、「まきわり」は文字通りの動作を表す動作名詞である。また、「えもんかけ」はモノ名詞であるが、「たすきがけ」はサマ名詞である。「ボタンつけ」は文字通り「ボ

タンを付ける」という身体の動きを表す動作名詞であるが、「ランクづけ」は抽象的な頭脳動作を表し、どちらかといえばコト名詞に近い。

例外3. (5^{'''}) の規則の平板型の例として挙げられているのは、「先物買い (さきものがい)」「席替え (せきがえ)」「衣替え (ころもがえ)」「下手物食い (げてもものぐい)」「温野菜添え (おんやさいぞえ)」など、ほとんどが連濁しているものばかりである。

解釈：事実、これらの動詞を用いた動詞由来複合語で連濁していないものを見つけるのは難しい。「さきものがい」は経済学のターミノロジーであり、「ころもがえ」は日本の年中行事で、「せきがえ」は学校の生徒にとっては大切な一種の行事で、いずれも個々の動作を表す動作名詞でなく、日本人に定着した習慣を表すコト名詞である。また、「おんやさいぞえ」はサマ名詞、「げてもものぐい」はサマ名詞かヒト名詞である。

このように見てくると、動詞由来複合語で [0] にならないのは、モノ名詞か文字通りの身体的動作を表す具体性の高い動作名詞である。

また、[0] になるのは、連濁がないものでは比喩動作を表す動作名詞と比喩動作によって表されるコト名詞、連濁があるものではコト名詞とサマ名詞である。

ここで、名詞として抽象度の低いものから高いものへと線形順序を作ってみると、

(7) モノ名詞 < ヒト名詞 < 即物的動作名詞 < 比喩動作名詞 < コト名詞 < サマ名詞

となると考えられる。これは、右に行けば行くほど、プロトタイプの意味からだんだん意味拡張されていくということを物語っており、それ故、連濁のある平板型が最も拡張された意味を有しているということになる。一方、名詞としての安定度の低いものから高いものへの線形順序は、この逆になるであろう。

それ故、動詞由来複合語のアクセントと連濁が表すのは、

(8) 中高型の語 < 連濁のない平板型の語 < 連濁のある平板型の語

という順番で抽象度がだんだん高くなっていくと同時に、名詞としての安定性が欠けていく。名詞としての安定性が欠けていくにつれ、平板型と有声化を施して安定性を得ていく。言語の恣意性が最も高いと思われるアクセントにこのようなバランス配合が行われるのは、日本語の有する自然の配剤であろうか。

2. 2. 動詞由来複合語のNV型①とNV型②の語構成と統語構造

影山 (1999) は、NV型の動詞由来複合語の働き方を、次のように分類している (p.118-119)。

(9) A : N+V複合語が全体として名詞になる場合

例 「山登り」「あら探し」「爪切り」「金持ち」

B : N+V複合語が全体として動詞 (述語) として働く場合

例 「ジープを丸洗^いする」「運賃を値^上げ^げする」

C : N+V複合語が全体として形容詞的に働く場合

例 「大学出^の (野球選手)」「親譲^りの (無鉄砲)」

このうち、AはNV型①に当たるが、「山登り」「あら探し」はコト名詞、「爪切り」はモノ名詞 (道具)、「金持ち」はヒト名詞であろう。これらはすべて、「VNをする」のように、VNが形式動詞のヲ格補語となり得るものである。VNという動作名詞の内部にすでに「NをVする」というヲ格補語が組み込まれている構造ゆえである。

これに対し、NV型②に当たるBは、VNの内部にヲ格補語が組み込まれていないゆえ、「丸洗^いをする」「値^上げ^げをする」とは言い難く、「ジープの丸洗^いをする」「運賃の値^上げ^げをする」と、目的語を加えなければヲ格を取り得ない¹⁸。

一方、CはBと同様NV型②であるが、Bと違って動詞部分にアスペクトが組み込まれている。「大学出^の野球選手」は「大学を出^ている野球選手」、「親譲^りの無鉄砲」は「親が譲^つた無鉄砲」と、完了のアスペクトが入り込んでいる。「東京行き^の (列車)」もこの類に属すると思われるが、これには「東京に行^く列車」ということで、未完了のアスペクトが含まれている。これらはみな、すでにアスペクトが含まれているから、形式動詞スルをつけてテンス・アスペクト表示をする必要がなく、それ故スル動詞としては使えず、専らサマ名詞として働くことになる。

以上の考察、また、前節の考察から、伊藤・杉岡 (2002) を参考に、2種の動詞由来複合語をまとめれば、次のようになるかと思われる。

(10) 伊藤・杉岡 (2002: 130) を参考に筆者が作成

	NV①	NV②
例	「缶切り」「ゴミ拾い」「ボール投げ」	「手書き」「薄切り」「丸洗い」
複合の型	動詞連用形と内項の複合	動詞連用形と付加詞の複合
指示対象	動作そのもの、動作主体	複雑述語 (動作・状態)
品詞	モノ名詞、ヒト名詞、動作名詞	動作名詞、コト名詞、述語名詞
アクセント	中大型・平板型	平板型
連濁	起こさない	起こす
生成レベル	項構造	語彙概念構造

杉岡・小林 (2001) は、英語の動詞由来複合語が動詞の目的語や補語といった統語的選択に基づいているのに対し (Roepert & Siegel 1978, Selkirk 1982)、日本語の動詞由来複合語は意味レベルで生成されると指摘している。例えば、「卵を茹でる」という動作の語彙概念構造は次のようである。

(11) [xACTONy] CAUSE [BECOME [y BEATz]]
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
 動作主 茹でる 卵 変化 茹で上がった状態

この全過程で「茹でる」の連用形「茹で」を後項にした複合語ができる。

(12) (行為(ACT)) → (変化(BECOME)) → (結果状態 (BE))
 ↑ ↑ ↑
 釜で/塩で 徐々に 固く
 (杉岡・小林2001)

つまり、この過程から「(卵の) 釜茹で」「(卵の) 固茹で」「(卵の) 塩茹で」などの複合語が形成される¹⁹。これが、NV②の生成過程である。

一方、NV①の生成は、NがVの内項 (目的語) であるゆえ、項構造のレベルで生成される。例えば、「拾う」という動詞の必須項は [Ag (動作主・外項)、Th (対象・内項)] の2つだけであるが、外項は動詞と結合して複合名詞の一部になることはできないという規則があるゆえ²⁰、統語的な必然性を以て「内項+動詞」が複合される。

以上、動詞由来複合語のNV型について、その語構成と統語構造を先行研究から概観した。

2. 3. NV型②「塩焼き」の問題点

本稿で扱うのは、料理名に多く見られるNV型②である。料理名に見られる動詞由来複合語には、前節で述べたA、B、Cのルールに外れるような言語事実が見られるのである。

一つは、料理名の動詞由来複合語は、他の動詞由来複合語と違い、「～にする」という形が取れることである。前節で見たように、NV②型の統語構造は、V

の目的語をTとすると²¹、「TをNVする」と言い換えられるのであった。しかし、料理名のNVは、「TをNVにする」と言い換えるのが普通で、「TをNVする」はむしろ例外的なのである。

- (13) a アユを塩焼きにする。
 ?アユを塩焼きにする。
 b *ジーパンを丸洗いにする。
 ジーパンを丸洗いする

また、料理名の複合語は「NVのT」とも「TのNV」とも言えるが、一般のNV②型はそうではない。

- (14) a 味噌マヨネーズ焼きのアユ
 アユの味噌マヨネーズ焼き
 b 手書きの原稿
 ?原稿の手書き
 c *丸洗いのジーパン
 ジーパンの丸洗い

では、料理名の複合語がすべて「TをNVする」と言えないかということ、そうでもないようである。

- (15) a アユの味噌マヨネーズ焼き
 アユを味噌マヨネーズ焼きにする。
 ?アユを味噌マヨネーズ焼きにする。
 b 鶏皮と人参の生姜炒め
 鶏皮と人参を生姜炒めにする。
 ?鶏皮と人参を生姜炒めにする。
 c アジとハーブのオープン焼き
 アジとハーブをオープン焼きにする。
 アジとハーブをオープン焼きにする。

(15)のa、bは料理の名前としてはあり得るが、述語として使う場合不自然に感じられ、「NVにする」にしなければならない。しかし、NV②型の複合語は、影山 (1999) によれば、「N+V複合語が全体として動詞 (述語) として働く」のではなかったか。これに対して、cだけは「NVする」でもいくらか自然なようである。

料理名は「TのNV」という形が普通であるのは何故か、料理名には「TをNVにする」という形が多く、「TをNVする」が例外的であるのは何故か、また「TをNVする」と言える料理名と言えない料理名があるのは何故か、以下、これらの点を考察したい。

3. 「アユの塩焼き」と「塩焼きのアユ」

(10)では、NV②の品詞は、動作名詞、コト名詞、述語名詞であった。しかし、「塩焼きにする」と言うからには、「塩焼き」部分はモノ名詞である。「塩焼き」はいかにしてモノ名詞になるのであろうか。

まず、「塩焼きのアユ」とは「塩で (塩を付けて)

焼いたアユ」ということである。

ところで、我々はよく物の形状を説明する時に、「茶色いカバンの、ポケットにワニの絵がついたの」とか「スカートの、くるくる回ると裾が広がるの」などの表現をする²²。

「ポケットにワニの絵がついた茶色いカバン」「くるくる回ると裾が広がるスカート」などの長い連体修飾を用いると、被修飾名詞である「カバン」「スカート」がなかなか登場しないので、表現実体がすぐに見えてこない。そこで、欧米語の関係代名詞のような語順を用いて「カバン」「スカート」という全体像を相手に早く伝えようとする。これは、「実体のプロフィール」であろうかと思われる。

同様に、「アユの塩焼き」は、「アユ」という全体像をプロフィールし、あとでゆっくり付加部分を説明する、という構造になっている。

(16) 塩焼きしたアユ→アユの塩焼きしたの→アユの塩焼き
 ↑
 塩で焼いたアユ→アユの塩で焼いたの

また、次のようにも解釈できる。奥津（1975）は、NVタイプの複合語はNVNの最後部のNが消去されたものだとし、次のように示している。

(17) 味ヲ ツケル コト ⇒味ツケコト⇒味ツケ
 カンヲ 切ル モノ ⇒カン切りモノ⇒カン切り
 モノヲ トル ヒト ⇒モノトリヒト⇒モノトリ
 左ガ 利ク サマ ⇒左利キサマ⇒左利キ
 日ガ 暮レル トキ ⇒日暮レドキ⇒日暮レ
 水ガ タマッタ トコロ ⇒水タマリトコロ⇒水タマリ（奥津1975：169）

これは、名詞の種類起源にもなる分類法であるが、この後部の「コト」「モノ」「ヒト」「サマ」「トキ」「トコロ」は、総称名詞とも考えられるのではないか。

例えば、「モヤシ炒め」「ニラ炒め」「レバー炒め」などを総称して、我々は「炒め物」と呼ぶ。この「物」の外延に「モヤシ」「ニラ」「レバー」などが含まれている。

(18) モヤシ ┌ ── 炒め → モヤシ ┌ ── 炒めモノ
 ニラ ┌ ── 炒め → ニラ ┌ ── 炒めモノ
 レバー ┌ ── 炒め → レバー ┌ ── 炒めモノ

これに、炒める際の調味料として醤油が必ず使われるとしたら、「醤油炒めモノ」になる。そして、「モノ」でなく個々の材料のモヤシ、ニラ、レバーなどがそれぞれ復活した場合、総称名詞「モノ」は個々の材料のモヤシ、ニラ、レバーなどへと具体化し前部へと分散していく。さらに、「醤油炒めモノ」はすでに名詞で

あり、「モノ」が取れて「醤油炒め」だけになっても名詞としての性質は変わらないので、同じく名詞である「モヤシ」「ニラ」「レバー」と「の」で結ばれることになる。

(19) モヤシ ┌ ── 醤油炒めモノ → モヤシ ┌ ── の 醤油炒め
 ニラ ┌ ── 醤油炒めモノ → ニラ ┌ ── の 醤油炒め
 レバー ┌ ── 醤油炒めモノ → レバー ┌ ── の 醤油炒め

以上が、「TのNV」の解釈である。

では、このような「TのNV」は「NVのT」とどのようなニュアンスの違いがあるのだろうか。つまり、「塩焼きのアユ」と「アユの塩焼き」の意味の違いは何か。日本語は右側主要部の原則により、「塩焼きのアユ」と言うと「アユ」が主要部となり、目の前の塩で焼かれた魚がアユであるか、それとも他の魚であるか、に意識の焦点が置かれることになる。一方、「アユの塩焼き」は「塩焼き」が主要部なので、目の前のアユがいかなる調理法を施されたか、が意識の焦点である。かくして、「塩焼きのアユ」よりも「アユの塩焼き」の方が料理名としてふさわしいということになるのである。

4. 「NVにする」と「NVする」の調査と分析

本調査は、我が院生の葉乗杰君の協力を得て行われた。市販のレシピや商品名などで、「付加詞+動詞連用形」型の複合語と思われる例を採集し、得た例をコーパスで「～する」、「～し」で動詞的用法を、「～は/が」、「～で」、「～に」、「の～」、「～を」で名詞的用法を検索したものである。使用コーパスは筑波大学付属図書館の間蔵Ⅱビジュアルで、1985年1月1日付から2008年6月30日付までの朝日新聞でキーワードを検索し、集計した。

(20) 集計結果

	動詞用法	名詞用法
塩焼き	27件	2106件
マヨネーズ焼き	0件	23件
オイスターソース炒め	0件	3件
しょうが焼き ²³	0件	56件

一見して、名詞用法（「NVにする」）の方が動詞用法（「NVする」）よりも圧倒的に多いことがわかる。以下、その例を挙げる。

(21) 今年4月から始めた地元産の「イワナ丼」（900円）は大人気だ。塩焼きしたイワナをタレで煮込み、ご飯の上に乗せれば出来上がり。（朝日2006/11/10朝刊）

(22) 塩焼きしたタイの身をほぐし、長さ2センチのせ

ん切りにしたショウガ、ネギの小口切りを炊けたご飯に混ぜ合わせます。(朝日2005/4/30朝刊)

- (23) 魚は組員同士で分配するが、キロ3000円で現地で即売もする。原田組合長は「今年の漁獲量は約500キロ。河原でみんなと塩焼きして食べるアユが最高」と話している。(朝日1996/8/30朝刊)
- (24) 2日間も増水した河川を探し回って、やっと手にしたアユ。塩焼きにして香ばしい味を堪能しようか。(朝日2008/7/12朝刊)

これらの例を分析する前に、例文(15)を再掲する。

- (15) a アユの味噌マヨネーズ焼き
アユを味噌マヨネーズ焼きにする。
?アユを味噌マヨネーズ焼きする。
- b 鶏皮と人参の生姜炒め
鶏皮と人参を生姜炒めにする。
?鶏皮と人参を生姜炒めする。
- c アジとハーブのオープン焼き
アジとハーブをオープン焼きにする。
アジとハーブをオープン焼きする。

この中でcだけが「NVする」が自然であるのは、何故だろうか。aの「アユの味噌マヨネーズ焼き」、bの「鶏皮と人参の生姜炒め」は、料理中に「マヨネーズ」や「生姜」が(少なくとも味や匂いは)存在し、我々はマヨネーズや生姜を口にする。しかし、「オープン焼き」は、できあがった料理に「オープン」は登場しない。(オープンは媒介道具に過ぎず、食べられない。)ここから、料理名の名詞部分に調理結果が存在しないものは「する」が付けられるのではないかと予測される。媒介道具を料理名にしているものは、この他にも「直火焼き」「炭火焼き」「鉄板焼き」などがあるが、できあがった料理に「直火」「炭火」「鉄板」などが見えない場合は、料理人は「特上の牛肉を直火焼きしたものです。」などと「NVする」型の口上を言うのではないだろうか。

上記の(21)~(22)で「塩焼きする」が使われている例は、いずれも「塩焼き」という行為が調理の過程で行われている例である。動詞用法は「塩焼き」だけにしかないという事実にも注目したい。塩は料理の最も基本的な調味料で、下茹でや下味付けの時など、調理のさまざまな段階で使われるものであるから、出来上がった料理に塩の存在が現れないものも多い。

また、(23)は「みんなと塩焼きして食べるアユ」と、「塩焼きする」「食べる」の2つの動作が連続している文脈なので、これも一連の動作の一環と理解される。

例えば、「炒めて塩コショウしたら出来上がり(塩とコショウをふりかける)」「ちょっとお酢してから煮

る(お酢で洗う)」など、調味料そのものに「する」をつけることがあるが、これなどは調理の過程の行為のいい例ではないだろうか。「NVする」という用法は調理の過程で行う動作で、「塩焼き」は調理の結果の料理に塩そのものが現れない場合に「する」が付けられると思われる。これは「塩茹で」も同じで、料理のレシピには必ず「インゲンは、ちょっと塩茹でしてから、胡麻醤油で和えます。」と書かれている。

それ故、動詞由来複合語に「する」がつけられるのは、「動作性の高い語」と一般化したい。

5. NVの動詞の種類

では、なぜ料理名に限ってこのようなことが起こるのだろうか。例文(14)を再掲する。

- (14) a 味噌マヨネーズ焼きのアユ (NVのT)
アユの味噌マヨネーズ焼き (TのNV)
- b 手書きの原稿 (NVのT)
?原稿の手書き (TのNV)
- c *丸洗いのジーパン (NVのT)
ジーパンの丸洗い (TのNV)

それぞれの名詞句が成立する文脈を考えてみる。

- (14) a これは、味噌マヨネーズ焼きのアユです。
(NVのT)
これは、アユの味噌マヨネーズ焼きです。
(TのNV)
- b これは、手書きの原稿です。(NVのT)
?これは、原稿の手書きです。(TのNV)
- c *これは、丸洗いのジーパンです。
(NVのT)
*これは、ジーパンの丸洗いです。
(TのNV)
- (14) a *味噌マヨネーズ焼きのアユをしないでください。
(NVのT)
アユの味噌マヨネーズ焼きをしないでください。
(TのNV)
- b *手書きの原稿をしないでください。
(NVのT)
原稿の手書きをしないでください。
(TのNV)
- c *丸洗いのジーパンをしないでください。
(NVのT)
ジーパンの丸洗いをしないでください。
(TのNV)

- (14) 述語名詞 しないで
ください

味噌マヨネーズ焼きのアユ (NVのT)	○	×
アユの味噌マヨネーズ焼き (TのNV)	○	○
手書きの原稿 (NVのT)	○	×
原稿の手書き (TのNV)	?	○
丸洗いのジーパン (NVのT)	×	×
ジーパンの丸洗い (TのNV)	×	○

いずれも、「NVのT」には動作性がなく、「TのNV」の方は動作性があることがわかる。しかし、「TのNV」が名詞としての働きを持つのは、「アユの味噌マヨネーズ焼き」以外は全滅である。（「原稿の手書き」は、原稿の手書きのものとコピーなどのものを比べるような文脈であれば、可能であろう。）ここから、料理名に用いられるNV型は、名詞としての安定度が高いことがわかる。何故だろうか？

この「TのNV型」の汎用性は、実は料理名に限ったことではない。「寝殿造り」「書院造り」などと言った場合、我々は「造る」という動作を思い浮かべるであろうか。いや、平安時代や鎌倉時代の歴史的な建造物を思い浮かべるであろう。「アユの味噌マヨネーズ焼き」「鶏皮と人参の生姜炒め」「寝殿造り」などの語を耳にしてすぐできあがった作品を思い浮かべることができるのは、「焼く」「炒める」「造る」などが作成動詞だからである。作成動詞とは、動作の結果、作品が残るような動詞である。残った作品は「TのNV」のTの部分に素材を、NV部分にその作風を現わす。

「書く」も作成性を有しているから、「原稿の手書き」はやや容認度が高い。しかし、この場合、「原稿」は書かれた作品そのものであって、素材ではない²⁴。それ故、「原稿の手書き」は「アユの味噌マヨネーズ焼き」ほど容認度が高くないのである。

さらに、「洗う」は作成動詞ではないから、「ジーパンの丸洗い」と言ってもジーパンが新しく誕生するわけではない。それ故、名詞性が弱くなる。（「ジーパンの和風縫い」とかなら格段に許容度が高くなるであろう。）

料理とは、もともと作成の概念を持ち、また素材を変化させて新しいものを作るという変化の概念も含む。それ故、「塩焼きの魚」は「塩で焼いた魚」と言い換えられ、NVのV部分は完了の aspekto を内包している。動詞の変化性と作成性、これが最終的に「TのNV」の名詞性を高め、「魚の塩焼き」を料理名たらしめている原因であろう。

6. 結論—「茶碗蒸し」か、「土瓶蒸し」か

しかし、同じNV型の料理名でも、やはり「NVする」と言いにくいものもある。庶民に比較的愛用され、語彙的な定着度が高い料理は名詞性が強く、「する」が付きにくいと想像される。例えば、「茶碗蒸し」と「土瓶蒸し」は「オープン焼き」と同様、共にN部分が道具であるが、できあがった料理に「茶碗」や「土瓶」が堂々と登場する。

広辞苑第五版を見ると、次のように書いてある。

(26) 茶碗蒸し：溶き卵と調味した出し汁を合わせ、魚介・鶏肉・ミツバ・松茸・かまぼこななどの種物とともに茶碗に入れて蒸した料理。

土瓶蒸し：松茸・魚・鶏肉・野菜などを土瓶に入れ、吸い物汁を加えて蒸すか煮ること。また、その料理。

つまり、「土瓶蒸し」の方はコト名詞としてもモノ名詞としても使われ、動詞性が高いが、「茶碗蒸し」の方はモノ名詞としてしか使えない。つまり、「土瓶蒸し」の方が「茶碗蒸し」よりも「NVする」の形が現われやすいと言える。

因みに、「茶碗蒸し」と「土瓶蒸し」の統計を見てみよう。

(25)	件数	比率
茶わん蒸しする	6	3.0%
茶わん蒸しにする	193	97.0%
土瓶蒸しする	26	3.3%
土瓶蒸しにする	770	96.7%

2008.12.05検索結果

わずかであるが、「茶碗蒸し」の方が「NVする」の用法が多い。

筆者は、「茶碗蒸し」と「土瓶蒸し」について20人の日本人にアンケートを取った。その結果は、以下のようである。

		茶碗蒸し	土瓶蒸し	どちらとも 言えない
Q 1	茶碗蒸しと土瓶蒸しと、どちらが好きですか。	15	2	3
Q 2	あなたの家庭では、茶碗蒸しと土瓶蒸しとどちらが多く食卓に上りますか。	19	1	0
Q 3	あなたの育った家庭では、茶碗蒸しと土瓶蒸しとどちらが多く食卓に上りましたか。	20	0	0

「茶碗蒸し」も「土瓶蒸し」も中の具と出し汁はほぼ同様のもので、ただ溶き卵が入っているかないかの違いであるにもかかわらず、「土瓶蒸し」は通常酒の肴として食されているようで、子供中心の家族の食卓では副菜になりにくい。また、容器の土瓶は茶碗に比べて高価で手に入りにくいので、家庭では作りにくい。加えて、汁を作るなら何も一人一人の土瓶を用いなくても、家庭用の大鍋で多量に作れば経済的である。それ故、土瓶蒸しは一般家庭の食卓にはあまり上らない。大人になって酒肴を嗜むようになり、土瓶蒸しの魅力に目覚めた人でも、子供時代は茶碗蒸しの食卓文化に浸かっていたというわけである²⁵。

これは、「茶碗蒸し」の方が「土瓶蒸し」より国民的普及率が高いということではないだろうか。そのような文化的な現象は語構成に反映しており、言語の分析によって文化の断面も充分覗けるのである。

【参考文献】

- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002)『語の仕組みと語形成』研究社
 奥津敬一郎 (1975)「複合名詞の生成文法」『国語学』101、19-34、斎藤倫明・石井正彦 (編) (1997)『語構成』ひつじ書房、に再録
 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
 影山太郎 (1999)『形態論と意味』くろしお出版
 影山太郎 (2002)『ケジメのない日本語』岩波書店
 影山太郎 (2007)『語形成と概念構造』研究社
 窪園晴夫・太田聡 (1998)『音韻構造とアクセント』研究社
 杉岡洋子・小林英樹 (2001)「名詞+動詞の複合語」影山太郎 (編)『動詞の意味と構文』242-268、大修館書店
 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
 西尾寅弥 (1977)「動詞連用形の名詞化に関する一考察」西尾寅弥『現代語彙の研究』斎藤倫明・石井正彦 (編) (1997)『語構成』ひつじ書房、に再録

長谷川伸子 (1999)『生成日本語学』大修館

注

- 例えば、土居健郎『甘えの構造』は、心理学を基礎にして日本人の精神構造を解明した。
- 例えば、九鬼周造『いきの構造』は、西洋哲学を基礎にして「いき」という意識現象を解明した。
- 本稿は、本学修士課程の院生、葉秉杰君のレポート「料理名に見られる“動詞由来複合語”の意味と統語—「付加詞+動詞」を中心に—」にヒントを得て書いた。データベースからの集計など、一部の資料は彼の承諾を得て借用したものである。
- 以下、動詞連用形をV(erb)と表す。また、名詞成分をN(oun)、名詞以外の付加成分(修飾成分—形容詞語幹、副詞、動詞など)をA(djunction)と表す。
- 例えば、「ちゃ(茶)+はたけ(畑)→「ちゃばたけ(茶畑)」。これは、「ちゃーはたけ(chā-hatake)」となった場合、後接語頭子音のhがその前後の母音(有声音)に同化して有声化した「同化現象」である。無声子音に挟まれた母音のiとuが無声化する「母音無声化」の現象は、この連濁現象を裏返しにしたもので、連濁現象も母音無声化現象も、同じ「同化現象」の逆の現われ方と言える。
- AV型以外にも、VV型、NN型、NA型、AA型など、ほとんどのパターンが連濁を起こす。
- 形容詞、動詞連用形、副詞のほか、方向名詞、数量名詞もAと認定した。
- この場合、「いいとこ取り」とは「いいところを取る」という文字通りの意味だけでなく、「普段協力しないで、利点だけを求める功利主義的な態度」という揶揄表現である。また、「大根切り」というのは「大根を切る」ことではなく、野球で下手糞なバットの振り方を大根を切る様子に喩えた比喩表現である。このように、比喩表現や揶揄表現は「目的語+動詞」の語構成を持っていても、語と指示対象が一致しない場合は、連濁が起こる。これは、比喩表現の一語性が強いからと思われる。
- 「足蹴(あしげ)」だけは尾高型になるが、これは古語の力行下一段動詞「蹴る」の連用形が「け」であり、この語構成は古語の形を残していることから、アクセントも現代語のものとは同一視できないと考えられる。しかし、この語を現代風に「足蹴り」としたなら、やはり平板型になるのではないだろうか。
- 「人殺し(ひとごろし)」は動詞部分が3モーラのNV①型であるにも拘わらず、アクセントが平板型である。これは、語の使用頻度が高くなるとアクセントが平板化するためだと思われる。その証拠に、「人殺し」ほど定着度が高くない日本酒の銘柄「鬼殺し(おにごろし)」は、平板でなく[-3]である。アクセントは平板化するのは、人口に膾炙することが多くなって2語の結びつきが強くなったためである。それは、「ひとごろし」がNV①型であるにも拘わらず、連濁を起こしていることからわ

- かる。
- 11 「腹切り（はらきり）」のアクセントは平板型である。これも、語の使用頻度が高くなってアクセントが平板化した例だと思われる。「ハラキリ」は英語圏の人にも知られるようになった、日本の一種の文化キャラクターとなっているようであるから。
 - 12 窪菌（1998）は、日本人が外来語を聞いた場合、[-3]のアクセントで発音するが、後から3番目の音が撥音または長音の場合は、アクセント核はひとつ前にずれて[-4]になるというが、これは外来語に限らず、日本人が新しい長めの言葉に接触した時も同様の反応をするのではないかと思われる。
 - 13 「ボタン付け（ぼたんつけ）」「衣文掛け（えもんかけ）」「スプーン曲げ（スプーン曲げ）」の場合は、後から3番目の音節が撥音なので、アクセント核は1つ前にずれる。
 - 14 それゆえ、名詞部分Nが2モーラの場合だけでなく、1モーラの場合でも平板型になる。「火消し（ひけし）」「気付け（きつけ）」など。なお、「絵描き（えかき）」が平板型でなく中大型であるのは、もとの動詞の原形「書く」の頭高型に影響されているためかと思われる。
 - 15 これらの複合語には席替え（せきがえ）、衣変え（ころもがえ）、先物買い（さきものがい）、下手物食い（げてもものぐい）、鴨越（ひよどりごえ）、温野菜添え（おんやさいぞえ）など連濁するものが多いが、それはアクセントが平板化していることと無関係ではないだろうと思われる。
 - 16 「絵描き（えかき）」「手出し（てだし）」など、例外がある。前項Nが1モーラの場合は、「荷揚げ（にあげ）」「田植え（たうえ）」「鵜飼（うかい）」「菜切り（なきり）」「火消し（ひけし）」「茶漉し（ちゃこし）」「手摺り（てすり）」「毛染め（けぞめ）」「茶摘み（ちゃつみ）」「蚊取り（かとり）」「輪投げ（わなげ）」「毛抜き（けぬき）」「茶飲（ちやのみ）」「木彫り（きぼり）」など、頭高型がほとんどなのであるが、「絵描き（えかき）」はなぜか中大型である。動詞「書く」の頭高に影響されたのかとも思われるが、定かな理由ではない。また、「手出し（てだし）」は頭高型であるが、「絵描き」のようにヒト名詞（具体名詞）ではなく、コト名詞（動作名詞）である。このことがアクセントに何らかの影響を与えているのかどうか、それは今後の課題である
 - 17 後から3つ目の音節が長音か撥音の場合は、アクセント核が一つ前にずれて、[-4]になる。
 - 18 動作名詞の構造については、長谷川（1999）p.78-86を参照。
 - 19 「（卵の）徐々茹で」は言わないが、「早茹で」は可能であろうと同書では言う。
 - 20 例えば、「子供（外項）がクズ（内項）を拾う」という文から複合名詞を作る場合、「子供のクズ拾い」は可能だが、「クズの子供拾い」は非文になる。外項は動詞と結合して動詞由来複合語を作ることができない。
 - 21 他動詞の目的語は生成文法では「対象：Theme」と呼ばれることから、略号をTとした。
 - 22 これらの最後の「の」は、代名詞とかコピー詞とか呼ばれている。
 - 23 「しょうが焼き」だけはこのコーパスの資料では充分でなかったので、別の資料を用いた。
 - 24 「書く」の素材は曖昧である。それ故、「書く」には作品性はあるが、素材を加工して新しいものを生み出す作成動詞とは種類が違うと言えよう。「書く」を「書記動詞」と呼ぶ向きもある。
 - 25 調査対象に「土瓶蒸しがムチャクチャ好きで、家庭に土瓶が7、8個備えてある。」という人であるが、これは「通」の部類に入るもので、例外的なケースであろう。その人も、自分の母親は茶碗蒸しの方を多く作ったと言う。

よしだ たえこ／台湾・政治大学 日本語文学科 副教授